

ばあちゃんのお店

寮を出て二十分。うねうね曲がった道と長い坂道をふうふういいながら歩き続けると、そこに『ばあちゃんのお店』がある。毎週日曜日の午前十二時から午後五時まで。それがばあちゃんたちの営業時間。商品は手づくりの野菜、煮しめ、漬物などで、スーパーでは買えない安さとおいしさが自慢だ。「あっはっは。」店の奥からも軒下からも、ばあちゃんたちとお客さんの笑い声が聞こえてくる。店の前を通ると「茶でも飲んでいかな。お菓子もあるっちゃが」とすぐに仲間入りしてしまう。お菓子や煮しめを並べて世間話に花をさかせる小さな店は、終始笑い声が絶えない。親元を離れて寮生活をしている私は、ここにくると何だかほっとする。

いつ行っても元気なものだから、ある日

「何でそんなに元気いっぱいなんですか」と聞いてみた。

するとばあちゃんたちは口ぐちに話しだす。同時に喋るものだから、聞きとれずに思わず苦笑いしていると、「ほら、聞こえんっちゃ。もつとゆつくり喋らんと」と言う。そんなばあちゃんたちを見ていると、元気が出た。後で話を聞いてみると、ばあちゃんたちは店を始める前はあまり元気がなく、引きこもりがちだったそう。仕事を退職し、のんびり過ごすのは楽だったが、毎日が何となく過ぎてゆくだけでつまらなかったという。このままではいけないと思い、始めたこの店。百円、二百円で売る野菜に利益は求めていない。むしろお客さんとの会話がメインのようだ。店で人と関わることで、ばあちゃんたちは元気になっている。それはお客さんも同じで、「楽しかったー。また来るねー。」と笑顔で帰っていく。この話を聞いて、ばあちゃんたちの生きがいがこのお店だと思った。

どうやら『ばあちゃんのお店』で売っているのは、野菜だけではないようだ。